GP特集：書評論文５

『社会福祉の扉を開く』を読んで

大　友　昌　子

本書は社会福祉士課程科目「現代社会と福祉」（旧名称科目「社会福祉原論」等にあたる）のサブテキストとして執筆されたものである。学問には多くの場合「原論」とよばれる学問の根本を論ずる部分が不可欠であり、「原論」は学びの途にある者にとって入門であると同時に学びの到達点を集約したものであって、例えれば扇の要となる位置を占める。

本書はその扇の要に位置するテキストであり、とくに本書の題名「扉を開く」にもあるように入門に力点を置いたテキストであると言えよう。社会福祉という領域を具体的にイメージし得るよう社会福祉の現状やソーシャルワークの実際、そして基盤となる理念や思想について、研究教育を行う立場の大学教員と第一線のソーシャルワーカーが協働して、平易に、簡潔に執筆されている優れたテキストである。

本書はサブテキストという位置づけとのことであるが、ソーシャルワークのテキストとして単体で十分に活用できる内容と水準を有しているという感想を筆者はもった。社会福祉領域の要となる「現代社会と福祉」のテキストが、さまざまな断片から構成されることが多いなかで、本書は社会福祉制度の課題に焦点をしぼった解説と優れたソーシャルワーカーとして活躍する卒業生達の実践を豊富に組み合わせたこれまでにない一書である。とりわけソーシャルワーク実践の記述は、事例およびその背景分析、ソーシャルワーカーの働きとその結果および評価などがまとめられている。そのうえ、なによりも学ぶ者の理性と情緒に大きなインパクトをもって働きかけてくるのは、ソーシャルワーカーとしての「思い」の記述である。ソーシャルワーク教育における「思い」の重要性をこれらの事例を読んであらためて理解したように思う。「思い」とはソーシャルワーク実践のなかで他の要素には置きかえることのできない深い役割を果たしていることを、本書を読んであらためて理解した。

本書は３つの部分によって構成されている。第１部は「現代社会と福祉」で、福祉の諸分野における現今の課題が概説され、第２部は「福祉の現場から」で、様々な福祉の援助活動にたずさわるソーシャルワーカーによる執筆、そして第３部は「福祉の思想」として、社会福祉の政策や実践の基盤となっている理念や思想をトピックとして取りあげている。ことに第２部の「福祉の現場から」では13人のソーシャルワーカーがそれぞれの取り組みの実際を個人的体験を交えて執筆されており、抽象度が高くなりがちな「現代社会と福祉」を講じながら平素、困難を感じている筆者にも朗報となるテキストである。

その多彩なソーシャルワークの現場とは、①養護老人ホームの生活支援、②障害者施設の地域移行支援、③特別養護老人ホームと地域包括支援センターおよびケアハウスのネットワークづくり、④福祉事務所のソーシャルワーク、⑤児童相談所のソーシャルワーク、⑥社会福祉協議会のコミュニティワーク、⑦病院のソーシャルワーク、⑧精神保健のAA患者とソ－シャルワーク、⑨発達障害児支援、⑩地域福祉権利擁護、⑪地域障害者職業センターの就労支援、⑫家庭裁判所調査官の非行少年支援、⑬NPOによるホームレス支援活動などで、心を揺さぶる豊かな実践事例がつづられている。また第３部の「福祉の思想」では、「宗

教と福祉」「他者理解と受容」そして「福祉のまちづくりの思想」など思いがけない新鮮なトピックが取りあげられている。

次に筆者が関心をもった課題、社会福祉領域の「原論」をめぐって、本書の読了から得た着想をふまえて検討してみたい。

学問の「原論」とは、その学問の根本となる理論を論ずるものである。隣接の諸学問の「原論」を管見すると、学問の本質や目的を科学として論ずるものであったり、理念、思想を哲学的、歴史的アプローチで論じていたりする。一方、社会福祉という学問の「原論」とは何か、何をどのように論じたらよいのかについて、我々はいまだ定まらない学問状況のなかにあると筆者は認識している。こうした学問状況についての認識のなかにあって、筆者は本書を一読して、そこから強く訴えるメッセージを確かに感受したように思った。それは本書に描かれた多様な第一線の実践に横串のように貫かれているなにものかである。そのなにものかは社会福祉の学問としての「原論」というより、ソーシャルワーク実践者のための「原論」としての特徴を示していると思われた。それはソーシャルワーカーの「思い」として言語化されているいくつかの共通する言葉である。すなわち実践する立場からの「思い」や実践への「姿勢」を言語化したものである。この「思い」に対応するのが本書の第３部の「福祉の思想」であろう。すなわち、ソーシャルワーク実践の「原論」とは「思想」である。

一方、社会福祉の学問の「原論」は「理論」であることが求められるのではないか。学問の「原論」は当該事象を説明する根本的な「理論」である。根本的な「理論」は１つの場合もあるし複数の場合もあるが、基本的ないくつかの「理論」を体系化することで「原論」は構成される。そこで筆者の着想は、おそらく「実践の原論」と「学問の原論」は簡単には一致しないと考えておいた方がよいだろう、ということである。むしろ社会福祉の学問では「実践の原論」と「学問の原論」が緊張関係のうちに対話するダイナミズムのなかに新たな「思想」や「理論」を生み出していくと整理することによって、生産的な思考の装置を設定し得るのではないだろうか。社会の変動とともに刻々と変化する人々の暮らしに敏感に反応していくことが求められる社会福祉の領域では、固定したイメージの「原論」はふさわしくない。すでに本書の「福祉の思想」として括られているトピックのなかには、「思想」よりはむしろ「理論」という性格の強いテーマも含まれている。とはいえ「思想」と「理論」の腑分けもまた簡単なことではないが、これらも含めて対話のダイナミズムに持ち込んでみたい。

このように本書の新鮮で真摯な取り組みは、筆者にこうした着想と思考を喚起して下さった。すなわち、本書が「福祉的人間力」のあるソーシャルワーカーの人材育成を目標とし、実践に役立つテキストづくりをめざしているところから、本書の執筆者や編者の「意図」は、本書の構成のなかで見事に貫徹され、具現化されているといえるだろう。

山口県立大学社会福祉学部は、文部科学省による「2007－2009特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に採択され、２年半にわたる取り組みの中からサブ教材ブックレットのシリーズを生み出した。この書評で取りあげた『社会福祉の扉を開く』（加登田恵子編著、他30人の執筆陣）はこうしたブックレット・シリーズ12冊本の中の１つである。

この特色GPは、「＜重層的学生支援教育＞による福祉人材養成」というテーマを掲げ、「福祉的人間力」のあるソーシャルワーカーの人材育成を目標に、調査、研究会や合宿の実施などを通して、各教員の専門性をふまえつつ、教員サブグループが創出された。このブックレットは、こうした教員間の密な情報交換の中から生み出すことができた教材であったという。積極的な教員間の連携により、こうしたサブ教材ブックレットを生み出したその作成過程は、学部全体の相互研鑽の場ともなったことが、加登田恵子「＜重層的学生支援教

育＞による福祉人材養成－特色ある大学教育支援プログラム実践報告－」（『山口県立大学社会福祉学部紀要』通巻第16号、2010年３月発行）に明らかにされている。この文中で加登田氏が指摘されるように、大学教員という個別活動の傾向が強いメンバー達が、このように連携し、チームで取り組んだ実績は、目を見張るばかりのプロセスである。本書を含むブックレットシリーズが、教授者や学生、そして第一線のソーシャルワーカーにどのように活用されていくのか、さらに今後に注目したい。

最後に、このような学びの機会を与えていただいた山口県立大学社会福祉学部に感謝を申し上げるとともに、見当違いの論を展開した可能性もあることから、謝して不備をご教示下さるようお願いしたいと思います。（中京大学現代社会学部教授）

リプライ

思想と理論と実践と

編著者　加登田　恵　子

はじめに

2007年に文科省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されたことをきっかけに、山口県立大学社会福祉学部の教員を中心にサブグループを作り、平素の授業で実際に活用できるサブテキストを12冊のシリーズで刊行した。そのうち『福祉の扉をひらく』は、主として１年次生が前期に履修する「社会福祉原論Ⅰ」における社会福祉の概括的オリエンテーションならびに１年次後期に始まる各福祉分野論の導入のために編纂したものである。

評者の大友昌子中京大学教授には、本書が一つの論旨にしたがって体系的に構成された単著や論文集と異なり、かなり趣の違う３部で構成されているだけでなく、かなり多くの短編をとりまとめたものであるため、書評を論ずるには困難が大きかったものと思われる。しかしながら、編著の意図という次元に踏み込んで丁寧にご覧いただき、とくに第２部の実践報告から伝わるものから着想された「実践の原論」と「学問の原論」とのダイナミズムについて、ひいては「思想」と「理論」との関係性という、社会福祉学において常に問われ続けている命題につなげて刺激的なコメントを頂戴したことに、心底より感謝申し上げたい。

この課題に正面から応える力量もないが、この機会に私自身が本著の作成過程を通じて考えたことなどを若干記すことよりお礼に代えたい。

１．考えるソーシャルワーカーへ

社会福祉学部に入学してくる学生は、それなりに社会福祉について関心を持っているのであるが、例えば祖父母の介護問題や家族に障害者がいることなどの個人的体験レベルの興味関心に留まっていたり、逆に実感が伴わないままに、教科書的記述を鵜呑みにしているだけで、その認識の範囲や程度はかなり限られたものである場合が多い。また大学入試を突破したばかりの１年生は、悲しいかな、生真面目な学生ほど、教科書に解答が書いてあり、それを覚えるのが勉強であるような学習態度が染みついていることが多い。その殻を破り、社会福祉への問題意識を持って自分なりに追求するという学問の姿勢に転換するには、どのような仕掛けが必要であろうか。また、自分たちが生きている「現代社会」という時空のリアリティに目を開かせるには、どのような、問いかけが必要であろうか。何より、社会福祉を学ぶことの意義やおもしろさは、どのようにしたら伝わるのであろうか。一年次に初めて出会う専門科目である「社会福祉原論Ⅰ」（入門編）は、かなり重要な位置を占めていると思うが、本書は、編者が常日頃頭を痛めているこれらのことについて、学内外の皆様のお力を借りながら副教材として少し工夫してみた試みの作品である。

具体的なねらいは３つあり、それは３部構成という形に表れている。いわく、問題意識の喚起、ソーシャルワーク観・実践者像の提示、実践思想の例示である。

第１部では、１年次後期に始まる「児童福祉論」「高齢者福祉論」「障害者福祉論」等の分野論や、２年次以降に配置している「社会保障論」「公的扶助論」「精神保健福祉論」等の科目の導入へとつなげるために、第１部では、現代社会における各福祉領域におけるヴィヴィッドな課題をそれぞれの担当者にまとめて頂いた。

紙数が限られているため、あくまでも＜さわり＞であろうが、これらを全体として読むことにより、「社会福祉」という学問の領域はこんなに広いのだということ、また、これから解決が求められている現実的課題が山積しているのだということ知ること、さらにそれらに今後取り組むことには社会的意義があること、それらが学生に伝わると嬉しい。これらは、学生としての勉学へのモチベーションを高めるだけでなく、本学部が「福祉的人間力」[(1)]と命名しているソーシャルワーカーとしての基本的資質の一つであると考えている。

２．ソーシャルワーク観・実践者像の獲得

第２部では、13にわたる福祉現場のソーシャルワーカーに実践報告をしていただいた。

福祉機関の公務員もおられれば民間施設の職員おられる、さらにNPOや病院のワーカーもおられる。職務多忙な中で、ご協力いただいたことを大変ありがたく思う。その大半は本学部の卒業生であり、残りは実際に本学部の実習教育等に関係して下さった方々である。お陰様で、大友氏から「心を揺さぶる豊かな実践事例」と評されたように、一つ一つの実践報告から、ソーシャルワークのダイナミズムが体感として伝わったならば、まずは所期の目的を果たしたと言えよう。

さて、本学部では、教育目標を「社会福祉の現代的課題に対応するため、深い人間理解と人権尊重の精神に基づいた専門知識と実践的技能を教授・研究することにより、共感する心と豊かな人間性をもって、社会生活で生じる様々な問題に主体的に対応できる福祉実践能力を修得させ、社会の幅広い分野における福祉の向上に寄与できる有為な人材を育成する。」と掲げている。このうち「福祉実践能力」があり、「社会の幅広い分野における福祉の向上に寄与できる有為な人材」とは、必ずしも社会福祉士や精神保健福祉士といった国家資格保有者のみを指すのではなく、広い意味での＜ソーシャルワーカー養成＞[(2)]を念頭に置いている。おそらく社会学部や公共政策学部等の一部として位置づけられている「社会福祉学科」よりも、社会福祉学の特性としての実践性をより強く意識していることは確かであろう。

しかしながら、我が国においては、ソーシャルワーク概念は、未だ完全なる社会的認知を得ているとは言えない。福祉実践とは、誰が、何を対象に、どういう風に、どこに働きかけることなのか？つまり、ソーシャルワークとは何をすることなのか？ソーシャルワーカーとは何者なのか？児童、障害者、高齢者、病者、生活困窮者……あらゆる人々を対象とし、機関、施設、病院、役所……あらゆるところで働く人々。しかし、医師でも看護師でも教員でもなく、ソーシャルワーカーなのである。この社会福祉実践像・実践者像を初学者に提示すること自体が、大変難しい。

私自身、遙か昔に社会福祉学科で学んだ時に、社会福祉の必要性や福祉問題についてはある程度理解したつもりであったにも関わらず、自分が福祉の現場で何をどう動けばよいのかとの確信が今ひとつ持てず、卒業という時期になっても、隔靴掻痒の感があったように思う。未だ何か大切なものを自分が掴めていないような気がして、おこがましいことではあるが「このままで就職すると、勤め先の業務はある程度こなすことが出来るかも知れないが、果たしてそれが福祉実践と言えるのだろうか？」との惑いがあったことを思い出す。掴めなかったものとは、社会福祉の本質というものなのか、社会福祉実践像といえば良いのかわからないが、とにかく、いくら諸説の定義を読んでも、ピンとこなかったというのが正直なところである。やはり経験不足だったのであろう。

その後、教壇に立つ立場となったが、おまえはそれをいかに説明するのかと問われると、いささか厳しい。授業では主として先達の実践を語り、時にはささやかな自分の地域活動やボランティア体験を語ることもあるが、圧倒的に迫力不足である。やはり現在、現場で格闘しておられるソーシャルワーカーの言葉をまず伝えたい。社会福祉実践とは「何をどう動けば良いのか」を分かってから始めるのではなく、時々刻々、クライエントの生

活の価値を実現する仕方を考え続けることが「福祉実践」であると気付いたからである。まずは、各実践報告を通して読むことにより、そういった実践イメージを学生のみなさんに感じ取って欲しいと考えた。

また、今日、社会福祉士が国家資格化されたことにより、「相談援助職」のプロフェッショントしてのソーシャルワーカーが一応位置づけられ制度化された。そのことの意義は大きいが、いくつかの問題点も感じている。その一つは、制度化されたことによるソーシャルワークの矮小化である。国家試験の出題範囲があたかもソーシャルワークの範囲であるかのように錯覚され、限定された福祉制度の執行業務のレベルのみで論じられつつあるのではないかという点である。ソーシャルワーク像をできるだけ柔軟に幅広く描いて貰うために、ＮＰＯの活動もあえて加えさせていただいた。

もう一つは、とはいえソーシャルワーカーが、社会福祉（士）としてその「機能」が社会的に位置づけられつつあるのに対して、その限定された機能でさえ、果たして日本社会はその価値を本当に認めているのであろうかというジレンマがある。実際の多様なソーシャルワーカーの動き（社会福祉実践）を、もっと具体的に一般社会に知らしめる必要があるのではないかとも考えた。本書がその一助となれば嬉しい。

３．福祉の思想と実践

今回、福祉現場のソーシャルワーカーの皆さんには、ご自分の仕事について後輩たちに一番伝えたいことを、わかりやすく書いて下さいとだけ依頼した。集まった原稿を拝読して、卒業生たちが6年～10年も経つと、このように実践者として成長するのかと改めて感激した。執筆者は、期せずして、ソーシャルワークとは単に優しい気持ちの表現でなく、専門的な理論や福祉的な価値について学んだ上での、主体的で創造的な取り組み（実践）であることを書き表して下さったように思う。

筆者の久保さんが、高齢者に「施設内だけで完結した生活はしてほしくない」と考えて、時刻表を覚えて一人で外出するための練習につきあったり、西野さんが障害者の地域移行という援助課題に取り組むにあたって「人は誰でも好きなところに住めるのだ」という＜当たり前のこと＞をきちんと基本姿勢に置こうとしたり、上田さんが移動の激しい現代社会では「たとえ住み慣れた土地であってもなくても」最期を迎える場所で「自分らしく生活するための支援」が必要でかつ可能なのだ……と結論する。これらは、ノーマライゼーションという福祉的価値の実践を表現したと言ってよいであろう。

また、増野さんが担当のアルコール依存者の問題の核心を「孤独感」と看取し、それから解放された時のクライエントの「最高の表情」を自分の宝物として銘記する。朴さんが難病患者の家族の言葉から「生きていくことの大切さ」と「しんどさ」に耳を傾け、さらにそれを見守る医療ソーシャルワーカーという存在があるということを訴える。ホームレス支援に取り組む奥田さんは、利用者に「ともだちでいよう」と呼びかける。ほかにも多くのソーシャルワーカーが、「繋がり」や「出会い」を表現する。これらこそ、現代社会の「個人化」の傾向が、生活問題としての「孤独化」へとつながること。それに対して、ソーシャルワーカーが単に職能としてだけでなく、人としても立ち向かっていることを示しているのではないだろうか。

大友氏は「本書に描かれた多様な第一線の実践に横串のように貫かれているなにものかである。」と評され、さらにそれらは、実践する立場からの「思い」や実践への「姿勢」を言語化したもの、すなわち「思想」であると述べられている。

岩崎晋也は「社会福祉を支えている価値や理念を、人間や社会のあり方に結びつけて普遍的な考え方としたもの」[(3)]が社会福祉思想であると説明しているが、大友氏の言われる「思い」も、単に「熱き思い」などと言われる感情や情熱レベルのみを指すのではなく、理性的に望ましいと価値判断された「人間や社会のあり方に対する考え方＝

思想」であろう。

1960年頃に、米国の社会事業学校連盟が、ソーシャルワーカー養成のためのカリキュラムを検討した際に、「凡ての援助専門職は、人間を“一つの全体”（man as a whole）として扱う」という見解に従うという立場で、全人的人間とその社会環境との統合（integration）に対応する科学知識を教科目に導入しようとした[(4)]。その際の検討委員の一人であったW.E.ゴルドンは、ソーシャルワークは学際科学であると当時に、「ソーシャルワーカーは、適当な科学者の援助を受け得ることはできるが、高度の枠組みは、社会事業実践に固有なもので、社会事業専門家の価値体系との調和を必要としている。」と主張し採用されたという[(5)]。社会福祉の実践理論は価値体系と“調和”であるという事に注目したい。実践には、方向性と判断が不可欠であるからである。我が国においても、社会福祉実践思想については、様々なアプローチがなされているが、まだ断片的であり十分に説明されているとは言えないように思う。

４．福祉思想と福祉理論

第３部では「社会福祉の政策や実践の基盤となっている理念や思想」について、トピックスを集めたものである。厳密に体系立てて組み立てられているものではなく、社会福祉の分野で大切にされている諸価値についての言説と、さらに心理学や社会学、宗教学等々の各学問における“ものの見方”などが入り交じっている。さらに理論の概説と思われる記述も含まれているのも事実である。

大友氏にご指摘いただいた「理論的原論」と「実践的原論」の２本立ての説は、じつに興味深い。いわゆる「社会福祉本質論争」を想起させるようにも思う。しかし、ながら、それを対峙する２項として捉えるのでなく「この学問が２つの性格を異にする原論をその土台に据える必要があること、それは思想・哲学と科学理論の２つであり、両者の対話のダイナミズムによって、時代の変化に沿う学問領域であること」と、２項間のダイナミズムそのものに焦点を当てようとしているところがユニークな視点であろう。

しかしながら、個人的には社会科学の持っている客観性と人間科学の持っている真理性とは別であることをふまえつつも、以下の岡村重夫等の諸先輩の言葉に、とも社会福祉学としての魅力を感じている。

「いろんな関係のなかでわれわれは生きているわけです。そのなかでやっぱり、どの方向をとるかというのは生活者の決断なんだよね。ある人は経済をとるかも知れない。ある人は そうじゃない教育をとるかもしれない、あるいは文化をとるかもしれない。それは決断であって、その決断の論理というのは、客体化した科学ではつかめないのではないか。やっぱり、主体的なものじゃないか。」

「（社会福祉）はやはり、単なる客体的なものの把握ではなく、意味を見いだしていく。単なる原因・結果の因果論だけではなくて、意味をどうとらえていくか、言い換えれば、科学の分類からいえば、了解科学です。社会福祉というのは、研究の方向としては現象的なとらえ方ではなくて、主体的な新しい了解科学からもっと発展しなければ行けないと思う。それは、生活の科学でいいと思うんです。……。」「何に意味を見いだしていくかということが生活だと思う[(6)]。」岡村は、こういった認識において、「社会関係の主体的側面＝生活者」概念を打ち出してきたのであるが、この次元において思想と理論は融合しているといえないか。

さらに、岡村は「生活者というものを。いわゆる科学的に、客体的にとらえるとすると『ニード』ですが、そうじゃなくて、抑圧に抵抗していくというと『人権』じゃないかと思う。」と述べ、それに呼応して一番ヶ瀬康子が「（岡村理論では）社会福祉というのはレジデューアルな面とボランタリーな面があると。その側面（人権の視点）というのは、まさにボランタリーな視点を貫いての見解。私は、単なるニード論からは福祉のボランタリー論は生まれて来ないと思うのです。」と述べている。

エビデンス重視の研究方法が、社会福祉の科学的手法として重視され、所定の「援助技術」を修得した人材が国家資格のあるソーシャルワーカーとして認められるようになった今日、ソーシャルワーカーは既存の福祉制度の担い手、あるいは行政に資源として活用される範囲での福祉マンパワーの地位に甘んじつつあるのではないか。むしろ、社会福祉の専門性と無縁の若者がホームレスとともに生きようとし、開発途上国へ旅立ち、過疎地で福祉起業家として奮戦している。それに取り組むことで、自身として、岡村のいう「セルフ・ヘルプのボランティア」として育ちつつある。そうしたダイナミズムを考えると二項対立的な概念では捉えにくい。我々は、臆せず、生活者として幸福を追求するという価値を含んだ理論を打ち出しても良いのではなかろうか。

注

⑴山口県立大学社会福祉学部が呼んでいる「福祉的人間力」とは、１）自分を見つめ、他人を受け入れる力、２）広い視野から論理的に考え、まとめる力、３）人権や社会に関心をもつ視点、４）仲間とともに活動を創り出す力、５）社会人としての常識や責任感、の５つの力である。

⑵いわゆる社会福祉本質論争においては「政策論的立場」と「方法論的立場」と分けたり、「社会福祉実践」と「ソーシャルワーク」を分け、その場合の「ソーシャルワーク」はいわゆるアメリカン・ソーシャルワークであると限定したりされてきた。ここでは、単純に社会福祉実践＝ソーシャルワークと読み替えることとする。

⑶岩崎晋也「社会福祉思想に関する諸問題」『社会福祉研究』、2010年、p.114

⑷社会事業学校連盟『カリキュラム研究総合報告書』、1959年

⑸嶋田啓一郎編『社会福祉の思想と理論』、ミネルヴァ書房、1980年、p.48

⑹大塚達雄、阿部志郎、秋山智久編『社会福祉実践の思想』ミネルヴァ書房、1989年、pp.301-304